



# 大阪商業大学 FD ニュースレター

第9号

2011年11月発行

(FDとは…Faculty Developmentの略。教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称。)

## ■目次■

- P. 1 平成23年度公開授業および意見交換会開催される
- P. 2 公開授業を終えて  
 ①経済学部経済学科 教授 西嶋 淳  
 ②総合経営学部経営学科 助教 盛岡貴昭  
 ③総合経営学部経営学科 専任講師 法雲俊栄
- P. 5 公開授業意見交換会 … 教務課 松谷美樹
- P. 7 〈大学院FD〉大学院中間報告会、開催される  
 … 大学院地域政策学研究科 教授 初谷 勇
- P. 8 大学院修士論文中間報告会感想  
 … 大学院経営革新専攻担当 教授 孫 飛舟
- P. 8 大学院修士論文中間報告会を終えて  
 … 大学院地域政策学研究科経営革新専攻 修士課程 出海朱絵
- P. 9 報告：「大学コンソーシアムひょうご神戸 第6回FD・SDセミナー」に参加して  
 …経済学部経済学科 准教授 杉田陽出



2011.11.1(火)4限「哲学」公開授業風景

## ■平成23年度公開授業および意見交換会開催される■

平成23年度本学FD活動の1つとして、公開授業が下記の日程に開催された。

授業科目・担当教員・教室については以下のとおりである。公開授業の選択については、今年度新任の教員ならびに年齢・性別・科目（語学や情報等も含めて）・教室の大小等に偏りのないように調整して選出した。

月 日	時限	科 目 名	担当教員名	教室
10月31日(月)	2限	経営学概論Ⅱ	河辺 純	423
	3限	コンピュータ会計処理論	矢部 幸太郎	情3A
11月1日(火)	2限	基礎中国語	林 妙音	435
	3限	経営情報論	法雲 俊栄	421
	4限	哲学	森岡 邦泰	431
11月3日(木)	1限	シロ経済学入門	西嶋 淳	412
	注：祝日・通常授業	3限	英語ⅡB	盛岡 貴昭
11月4日(金)	1限	基礎演習Ⅱ	橋本 信子	452

なお各授業において、FD委員会より受講学生にアンケートを実施（授業の進め方についてどのように思ったか、またこの授業について改善したら良いと思うことは何か）し、その結果もふまえての意見交換会を、11月9日（水）15:00～16:00（於：本館6階研修室）に実施した。参加者は公開授業担当教員および参観教員および担当の事務職員である。

## ■公開授業を終えて①

経済学部 経済学科 教授 西嶋 淳

ともあれ、いつもどおりの授業が行え、その意味で任を果たせて安堵したというのが「公開授業」を終えた私の率直な気持ちである。もちろん、講義に対する取り組みが不十分であることはよく承知しているつもりである。だからこそ、参観していただける先輩の先生方にありのままを観ていただき、ご批判を仰ぐ必要があると認識しているのだが、経験とは恐ろしいもので、知らないうちにその場の雰囲気にあわせて取り繕う術が身についてしまっているらしい。このような取り繕いが「公開授業」の趣旨に反することは当然であるが、より重要なことは、この手の取り繕いに受講生が極めて敏感だということである。受講生との信頼関係を深めることで未熟さを補おうと考える私にとって、受講生にプレを感じさせてしまうことは致命傷になりかねない。今回の「公開授業」の担当教員の中で、恐らく最年長で学部授業の経験の浅い私は、他の先生方とは少し異なったプレッシャーを感じながら自身の「公開授業」に臨んだ。

以下では、より多くの先生方にご批判を仰ぐという観点から、少々雑駁になるが、過去の経験とともに今回対象となった授業の方針・内容などについて書き記すことをお許しいただきたい。

私は、着任前の約20年間、民間のシンクタンクで調査研究、不動産評価実務に従事していた。学位を取得してからの8年間は大学院の嘱託講師を務めてきたが、受講生は社会人大学院生の比率が高かった。業務として講師を務めた研修会の受講生も、大半は市町村職員や不動産鑑定士で、多くは20代後半以上の年齢の方であった。そのため、学部生と同じ年齢層を対象とした教育経験は実のところ極めて乏しい。ただ、趣味の領域では、学部時代より30代半ばまでは基礎スキー指導員として活動を続けていたので、スキー学校や母校中学・高校行事において多感な中学生～大学生を相手に指導した経験は有していた。また、某政令市では、提案した固定資産税担当職員向けの研修カリキュラムが採択され、体系的な研修教材づくりや研修会運営に参画し貴重な経験を積むことができた。

このような雑多な経験をつなぎ合わせて取り組んだのが、経済学部1年生の必修科目である「マクロ経済学入門」（前期）であり、今回「公開授業」の対象となった「ミクロ経済学入門」（後期）である。両科目は、受講生の属性別に複数の先生方が担当されることもあり、このようなことにも不慣れな私は、着任前に教務課より提示いただいたシラバス原稿を眺めては間

の抜けた質問を繰り返す有様で、関係者の方々に多大なご迷惑をかけながらのスタートとなった。

勝手がよくわからないままに、得られた情報に基づき両科目の授業を進めていくうえでの課題として抽出した事項は次のとおりであった。

- 2年次の基幹科目に「マクロ経済学」、「ミクロ経済学」が配当されている中、内容をどう割り切るか
- 1限の授業、かつ、出席が成績評価対象外なので、遅刻者が予想される中、出だしの時間帯をどのように使うか
- これまで経済学との接点が少なかった受講生が多いと予想される中、90分間どのようにして引きつけるか
- 出席確認に受講生の携帯電話が活用される中で、携帯電話の目的外使用をどのようにして抑制するか

なお、説明を板書するかプレゼンテーション・ソフトを用いるかについては、使用教室が大教室（412）で、図を用いる機会が多いことなどを理由にプレゼンテーション・ソフトを用いることにした。そして、各方面で指摘されているその短所については、アニメーション機能を活用しつつ口頭説明を工夫し、同時に授業メモを配布して緩和を図ることにした。

前記に掲げた課題に関しては、先輩の先生方の助言をも参考に、まず、両科目をこれまで経済学に馴染みのなかった受講生に少しでも親しみをもたせて2年次に繋げるためのものと割り切ることとした。このような方針により、説明すべき理論の範囲を基本中の基本部分に限定できる。代わりに、手を変え品を変えて説明することにより、受講生なりの解釈を促すように努めた。また、社会人でさえ90分講義に耐えられなくなっている人が増えている実態に鑑み、授業の基本構成を、「最近の話題 経済？トピックス（の紹介）」、「出席確認」、「説明（前半）」、「ちょっと一息 経済学的？雑談」、「説明（後半）」とした。

前期の「マクロ経済学入門」では、当初配布した授業メモが項目立てのみの内容であったこともあり、照射したスライドを携帯電話のカメラ機能で撮影する受講生が登場したので、他の受講生から「シャッター音がうるさい」との苦言を受けることになった。しかし、本件については単純な解決は難しいような予感があった。そのため、本授業では「対応が甘い」との苦言を受けることを覚悟して、授業メモをスライドの内容に準じたいわゆる「虫食い」文形式に改め、定期テスト前には「S-Navi! 授業連絡」より授業で用いたスライド・ファイル（抜粋：閲覧のみ可）をダウンロードできるようにして凌ぐことにした。

このような教訓を踏まえ、後期の「ミクロ経済学入門」の初回授業では、前期授業での対応実績を錦の御旗に「授業中のカメラ機能の使用自粛」を要請したところ、「公開授業」を経て現在に

至るまでおおよそ聞き入れられている。

以上の私の授業運営は、経験豊かな先生方から見れば稚拙極まりないものと思われるであろう。ただ、希に自分でも驚くほど受講生が静かに私の説明に聞き入ってくれることがある。そのようなことに味を占め、当面は現在の方針で受講生の便益をより増大できるように努力を重ねたいと考えている。

## ■公開授業を終えて②

総合経営学部 経営学科 助教 盛岡貴昭

11月3日(木)3限目に担当科目である英語ⅡB、標準クラスのパブリック授業を行なった。公開授業は、私が英語指導で最も大事と考える4つの要素を、授業にうまく反映させているかどうかを再確認できる良い機会となった。

4つの要素の1つ目は、インプットの絶対量を確保することである。言語習得には習得する言語をたっぷり聞いたり読んだりする必要があると言われている。授業中は私の日本語での文法などの説明が長くなりすぎて、英語をインプットし、理解させる機会を損なわないように心掛けるようにしている。公開授業では教科書を使用して英語をインプットさせる指導以外に、Carpentersの歌を使ったアクティビティー、私が英語で読み上げた有名なスポーツ選手を学生に当てさせるクイズ、学生同士で英語を使用して質問して答えさせる練習などを行なった。

2つ目は、アウトプットをする時間を学生に与えることである。授業の初めに、英語で「昨日は何をしましたか?」や「週末は何をする予定ですか?」といった質問を私がして、学生が簡単な表現と単語を用いて答える練習を行なっている。毎回行なっているので、公開授業でも、私が英語で質問した数名の学生は、なんとか容易な単語と表現を使って答えることができた。そして2、3人の学生に、自ら作成した原稿に基づいて、英語で1分間のスピーチを行わせている。また、学生全員が話す機会を持てるように、ペアで互いに質問させ、答えさせるアクティビティーも通常通り行なった。

3つ目は、言語形式に焦点を当てることである。インプットとアウトプットの促進のみならず、従来からある文法訳読法や発音指導なども英語を意識的に理解させるという点で重要な指導方法である。授業参観に来ていただいた先生方は、大学生には容易すぎる指導内容なのではないかと思われたかもしれないが、中学校の英語で躓き、英語に対する苦手意識を抱いた学生が多いスタンダードクラスでは、もう一度基礎から指導する必要があると感じている。言語形式に焦点を当てた指導では教科書を主に使用するが、リスニングで使用した歌の歌詞を

使って前回の授業で扱った文法の指導も行なった。文法を説明する際には、教科書には載っていないやや難解な解説も、学生の理解をより深めるために行なった。

4つ目は、モチベーションを高めることである。公開授業でも普段の授業通りに、学生が問題を解いている最中は巡回し、進むペースが他の学生より遅い学生に対するサポートを行なった。また、教師からだけではなく、他の学生からも学べる機会を与えるために、ある英語の問題をグループで協力して解く機会を普段の授業同様に設けた。問題が解けた学生がまだ解けていない学生を助ける場面が見られたことに喜びを感じた。1分間スピーチは「私の夢」か「私の宝物」のいずれかの題名で行なうように指定したが、この2つ以外の題でスピーチを行なっても構わないと伝えて、学生に自らトピックを選択する機会を与えている。公開授業では2名の学生がスピーチを行ない、初めの学生は「企業家になりたい」、次の学生は「教員免許を取得したい」という夢を英語で語った。「英語は苦手だけど、洋楽は好き」という学生もいるので、学生が気に入るような曲を選んで空欄のある歌詞を配布し、穴埋めをさせるアクティビティーも取り入れている。教科書に載っているアクティビティーだけではなく、学生のモチベーションを高めるために、自分自身でオリジナルな答えを引き出せるような質問を学生にペアでさせるような練習も普段通り行なった。

公開授業後の学生のアンケートでは、「いつも通りでわかりやすい」というコメントが比較的多かったので内心ホッとしている。しかし、「いつも通り」とは授業が単調だという意味だとも解釈ができる。毎回、学生に少し緊張感を与えてやる気にさせるバリエーションのある授業ができるように試行錯誤する必要がある。また、英語の授業がコミュニケーション的なものに変化していくにつれ、自分の英語力のなさを痛切に感じる。授業研究のみならず、英語の研鑽もしていかななくてはならない。

FD委員会のメンバーの先生方から、公開授業を行なった教員に向けて、レベルの低い学生よりも高い学生を引っ張ってあげられるような授業をするように心がけたほうがいいのかというアドバイスを頂いた。アドバイスを参考にして、やる気のある学生が、授業が容易すぎるといった理由で、やる気をなくしてしまうことは避けなければならない。毎回の授業中に、学生が授業についてこられているかを把握するよう心掛け、テストの確認を行い、分析し、授業経験を積みながら、学生の役に立てるように努力していきたい。また、親身になって各々の経験からアドバイスをくださった先生方、そして授業を見に来てくださった先生方に厚くお礼を申し上げたい。

## ■公開授業を終えて③

総合経営学部経営学科 専任講師 法雲俊栄

今回、私が担当する「経営情報論」が公開授業の対象科目となり、第6回目にあたる11月1日火曜日の3限目に実施することとなった。本講義の履修者は、282名と大人数の講義であるため、421教室の大教室を利用しており、当日は170名の学生が出席し、その他7名程の先生方にもご参観をいただいた。

この4月から商大に着任して驚いたことは、前任校でも同じ科目を担当してきたが、受講者の人数がとて多い科目であること。また、半期科目として教えることに慣れ親しんできたが、今年度から商大では、通年科目に切り替わり30回からなる内容へと変更になったことであった。どちらもその専門分野を教える教員にとっては、とても喜ばしいことであるが、履修者の100名以上からなる授業の進行に対して、さらに大きな難題を与えられ、また、各回の基礎的な資料を作り込みに大変苦戦をしていた最中であつた。そして、私自身にとって専任教員として3年目を迎えることになるが、知らず知らずのうちに授業の運営に対しての考え方が固定化しつつあり、今回の公開授業は、受講者やご参観いただいた先生方から生の声を聞くことで、新たな気づきをいただく貴重な機会となった。

公開授業の対象となった「経営情報論」では、主にパワーポイントを用いたスライド形式で資料を提示して授業の進行を進めている。各回利用したスライドはS-naviにアップロードして学生に資料を提供しており、5回毎に確認小テストを実施し、学生にとって知名度のある企業の分かり易い事例のあるときは、専門雑誌等の記事を抜粋したプリントを配布するという流れである。

授業終了後に寄せられたコメントは、主に受講者の私語が目立つといったご指摘が多く、学生とのコミュニケーション不足、ノートを取る量が多いのももう少し減らして欲しいといった学生からの要望や、ご参観いただいた先生方からも関連した内容のご指摘があつた。

ご指摘いただいた事項は、確かに私自身においても自覚しているところも多くあり、今後、これらの問題を改善するために、板書とパワーポイントによるスライド形式の適宜状況によって使い分け、また、レジュメ等の配布資料を穴埋め形式にして、退屈させない授業を運営する試みなどによって改善していかなければならないと実感した。

今回の公開授業期間が終了した後に行われた意見交換会で

は、公開授業の担当者による事後報告会のような形式と想像していたが、ベテランの先生方が過去同じように授業運営に苦戦されてきた状況や、それぞれの先生方において効果的な取り組みされてきたユニークな事例や、改善されてきた内容を深く聞くことができ、短い意見交換会ではあつたが、非常に有意義な時間であつた。例えば、私が抱えていた1つの大きな課題に対しても、諸先生方によって展開される解決方法などの発言は、パワーポイントを利用しスライドを使った授業のメリットやデメリットについての考えだけでなく、ノートを取るということに対する、受講者側の状況を心理的な側面から探るといふ。非常に興味深い意見を聞くことができた。

今の時代に本学のような文系の学生にとって必要なことは、高度な情報技術の習得といった知識も大切であるが、正しい情報技術の捉え方、応用方法がとても重要であると考えている。また、これまでの近代社会で広く受け入れられてきた主要な価値理念の中においては「平和と豊かさ」が求められてきた。しかし、これからの情報化社会においては「楽しさ」というもう一つの価値理念が加わり、それは多くの関係者である人々が心と力を合わせて交流し協働する、共通理念や目標実現に努める中から生まれてくる共々の楽しさであり、こういった新たな価値理念は、今後、教育指導の中にも求められる要素であると考えている。

今回の公開授業を通して、社会人として貢献できる人材の育成に努め、効率的な授業の運営ができるよう、新たに気持ちを入れ替えて取り組んでいきたいと考えている。

最後に、私が担当する公開授業にお忙しい中ご参観くださった先生方、また意見交換会で有益なコメントをくださった先生方に深くお礼を申し上げたい。



## ■公開授業意見交換会を終えて

教務課 松谷美樹

平成23年11月9日(水)の15:00より実施された公開授業の意見交換会には、授業担当教員およびFD委員会委員が参加した。回収した授業アンケートが担当教員に配布され、その後、前田啓一委員長より担当教員の先生方へ公開授業および授業アンケート結果の所感、普段の授業における悩み、工夫している点などについて質問があり、先生方より以下の通り様々な意見が出た。

### 【公開授業および授業アンケート結果の所感】

- ・ 語学の授業において、発音練習に重きをおいて授業を進めてきたが、授業アンケートをみると、学生はもっと文章の読み書きを学びたいと考えていることがわかった。語学の習得において自身が有効と考えている取組みだけでなく、学生の要望もとりいれて授業を進めていかなければならないと感じた。
- ・ 祝日で通常授業を実施する日に公開授業を行ったため、受講学生数が少なかった。
- ・ 授業アンケートをみると、「授業の進行が早くてついていけない」という学生がいる一方で、「もっと早く、レベルをあげた授業をしてほしい」という学生もいる。どの学生にあわせて授業を行うかについて、難しいと感じた。
- ・ レベルを高くして学生を退屈させる事と、レベルを低くして学生を退屈させる事。どちらが学生に失礼か？授業のレベルは高く設定すべきだ。
- ・ 自身は小教室での授業ばかりだが、大教室の公開授業を参観し、私語も多く、大勢の学生を授業に集中させる事の大変さを感じた。
- ・ 他の先生の公開授業を参観し、パワーポイントのスライドがとても見やすく、参考になった。

### 【普段の授業での悩み】

- ・ 一方的に講義を行う事が多い。学生が自ら事例を挙げて発表するような授業もしたいが、難しい。
- ・ 学生の私語が多い。飲食する者もいる。
- ・ 定員ギリギリの教室で授業を行っているので狭いと感じる。
- ・ 学生が互いに学びあえる授業にしようと工夫しているが、授業アンケートを見ると「学生同士でする取組は嫌」という意見もあり、コミュニケーションをとりたがらない学生

がいて困っている。

- ・ PCA 会計のソフトを使用する情報の科目。抽選制だが、履修登録したにも関わらず一度も来ない4回生が10人ほどいる。その分、席が余っており、有効活用できていない。
- ・ 途中退出する学生が多く、教える側のモチベーションも下がる。
- ・ 大教室は騒がしくなりがち。少人数のクラスに分割して行いたい。
- ・ 携帯電話による出席システム導入によって、私語が増えたように思う。出席点をとるボタンを押すためだけに授業に来る学生が私語をして授業の進行を妨げている。

### 【普段の授業で工夫している点】

- ・ 声にめりはりをつけるよう気をつけている。
- ・ パワーポイントによる授業を行う。毎回、授業内容をまとめたプリント(ポイント部分を空欄にしたもの)を配布。学生が空欄を埋めながら受講する形式にしている。
- ・ ミクロ経済学入門の授業では、「経済学雑感」としてオークションの理論について説明するなど、学生の興味をひく内容になるように工夫している。
- ・ 共同作業をさげたい、目立つのが嫌、という学生もいるが、一回の授業で必ず一度は学生全員が発言する機会をもつような授業の進め方をしよう心がけている。
- ・ パワーポイントは授業を進行する側にとっては便利だが、あくまでも板書にこだわった授業を行っている。教員が一生懸命板書する姿勢を学生に見せる事、学生と一緒に手を動かす事は大切だと考えている。教員のやる気、取組姿勢を、学生はしっかりと見ている。
- ・ 授業中に小レポートを書かせて集中力が途切れないように工夫している。
- ・ 宿題や配布プリントは、欠席した場合でも、当日授業以外で再配布しない。資料は学生同士でシェアしてもらう事と決めている。同じクラスの者同士の交流のきっかけ作りしてほしいと思っている。
- ・ 誰かが私語をすると、静まるまで授業を進めないようにしている。
- ・ 早退者のチェックを必ず行い、出席点から引いている。



今年度後期より、FD委員会担当者として初めて公開授業および意見交換会に参加させていただいた。意見交換会は公開授業担当教員の先生方と、FD委員会委員の先生方が向かい合って話し合う形式で行われた。

学生の授業態度（私語、早退等）や習熟度の差、出席確認システムや教室の設備等の周辺環境への意見、パワーポイント・板書・配布資料のそれぞれの効果の検証について等、幅広くも共通した課題が出て、先生方が様々な試行錯誤をしながら、それぞれが効果的と考える形式で授業を行っている現状が分かる意見交換会だった。

公開授業を行う意義のひとつは、今回の意見交換会のような場を持つことそのものにあるように思う。授業アンケートから見えてきた学生の要望や、他の先生の授業の工夫、日々の授業で抱えている悩みなどについて意見を出し合う事により、先生方一人ひとりに、新たな「気づき」や「共感」をもっていただくこと。FDの取組は「集まって話し合う場を持つこと」で初めて可能となる。次の段階では具体的なアイデアを出し、それを実行にうつしていくための話し合いが求められる。意見交換会での先生方の意見をお聞きしながら、学生および教員をそばでサポートする側である我々教務課としても「より良い授業体制のためにできることは何か」について、日頃から先生方との話し合いに加わり、検討をかさねていく必要性を感じた。



本館6階研修室にて：

平成23年11月9日（水）公開授業意見交換会

## ＜大学院FD＞「大学院中間報告会、開催される」

大学院地域政策学研究科 教授 初谷 勇

2011年10月22日(土)9時30分から16時35分まで、本学4号館4階441教室において、平成23年度の大学院地域政策学研究科「修士論文中間報告会」が開催された。今回の報告者は、地域経済政策専攻3名、経営革新専攻10名、計13名で、各々の氏名、指導教員及び論文テーマは右表のとおりである。

大学院の公式行事として年2回実施している修士論文中間報告会は、指導教授を含む大学院担当教員全員と在籍院生が一堂に会する場である。当該年度に修士論文提出を希望する院生が、研究の進捗状況と論文骨子を報告し、多様な専攻領域にわたる出席者から様々な質問や指摘を受け、批判や助言を得ることを通じて、各自の論文の充実や一層の洗練に役立てていくことが期待されている。教員にとっては、研究・執筆途上にある院生の研究姿勢や中間的な成果を把握する機会であり、論文提出時には、この中間報告会から論文完成までの間の院生の研鑽や努力の軌跡も推測しつつ審査に臨むことが可能となる。

今回は、13名の報告者に対して、指導教授以外の教員から概ね次のような指摘や助言がなされた。第一に、論文テーマについては、当該テーマを研究する意義やリサーチ・クエスチョンが明確であるか。また、修士論文のレベルに相応しいテーマ設定(画定)がなされているか。第二に、研究方法については、地域政策学研究に相応しいアプローチが選択されているか。先行調査を批判的に検討した上で自ら現地調査を行うなど一次資料に基づく検討に努めているか。政策分析にあたり国際比較の観点が踏まえられているか。統計解析の手法を適切に選択しデータ処理がなされているか。第三に、考察の内容については、単に問題点の指摘にとどまらず、地域政策学研究として問題解決を志向した報告者自身の見解が示されているか。現代的課題について直近までの事実関係の把握、紹介がなされているか。分類や類型化に係る概念や名称が適切に付与されているか。第四に、報告・プレゼンテーションについては、発声の適否やパワーポイント資料の正確性などである。

いずれの報告者も、相次ぐ質問や指摘に対して率直かつ熱心に回答、説明する姿勢が見られたが、こうした院生による研究報告会は、院生相互においても研究上の刺激を受け、新たな視角を切り拓く契機となる。大学院FDの一環としてさらなる充実に努めていきたい。

平成23年度 大阪商業大学大学院 地域政策学研究科 「修士論文中間報告会」 報告者一覧		
氏名	指導教授	論文テーマ
<b>【地域経済政策専攻】</b>		
金香花	瀧澤秀樹	「大阪猪飼野コリアタウンの形成史—徳山商店の創業者洪呂杓の経営活動を中心に」
馬 楽	西村多嘉子	「日本の「フードデザート」問題に関する研究」
レ・ティ・ゴック・ハン	前田啓一	「ベトナムの日本直接投資誘致政策について 裾野産業育成の観点から」
<b>【経営革新専攻】</b>		
張 娣	大橋正彦	「コンビニエンスストアにおけるCSR戦略の現状と課題」
出海朱絵	南方建明	「衣料品通信販売の業態分類別にみたリレーションシップ・マーケティング」
李 鋒	安室憲一	「中国の技術志向企業—「海信集団」のグローバル戦略—」
王 川	安室憲一	「アリババグループの発展とビジネスモデルの分析」
何 達光	古沢昌之	「中国企業の海外進出—対日進出における問題点—」
孫 利杰	山本誠	「日本企業における売掛金管理」
瀧本寛人	山本誠	「キャッシュ・フロー計算書の研究」
張 維	小川正博	「中国コンピュータ産業の特殊な発展経緯の課題と今後の可能性」
楊 莎	南方建明	「資生堂の中国市場進出戦略—2段階(日本→中国大都市→中国中小都市)修正による現地適応化—」
李 鵬	大橋正彦	「小売大手2社の比較—日中市場におけるウォルマートとカルフルの参入展開を中心に—」

## ■大学院修士論文中間報告会感想

経営革新専攻担当教員 孫飛舟

10月22日に行われた大学院修士論文中間報告会に参加させていただいた。今年は3度目の参加で、過去2年間はGA (Graduate Assistant)として主に自分が担当する院生の報告を聞いた。今回は大学院の担当教員となってから初めて「フル出場」して、計12報告をすべて聞いたのである。正直、かなり疲れた。しかし、極度の緊張の中で良く頑張ってくれた院生の皆さんのことを思うと、少し恥ずかしい気がする。

報告会を聴いた感想は主に以下の3点にまとめることができると思う。

まずは、皆さんがかなり良く準備したということである。12報告の内、日本人学生1名を除いてすべて留学生による報告であった。事前の資料準備から当日の報告に至るまで皆さんは流暢な日本語でこなした。実は去年の参加経験から、留学生の皆さんの日本語には少し不安があった。しかし、「皆がよくぞ頑張ってくれた」と拍手を送りたいほど日本語が上手であった。これも指導される諸先生方のお蔭だと思う。とにかく聴く方にとってはまったく違和感なく耳に入ることができた。

次に、報告内容からみた場合、報告者全員の研究テーマは共通して実証研究の域にあり、現象面の資料収集に少し偏りすぎた感がある。研究論文は報告書と異なり、「理論的」な分析は不可欠である。現象面の資料も大事だが、それを既存の理論枠組みでどう解釈するのか、そして、既存理論の限界は何か、というより深いレベルでの考察、分析が研究論文の醍醐味であり、修士課程2年間の研究の集大成ともいべき成果であろう。この点からすると、理論的な考察まで深入りした報告は少なかったように思う。

3点目は、研究に際してのロジックが不明確な報告が見られることである。研究には、問題意識、検証方法、結論(インプリケーション)という3段階がよく用いられる。少なくともこの3つの段階に共通した一本の軸がないといけない。例えば、ある企業の成功はそのマーケティング戦略に由来すると仮定し、それを検証することを問題意識としよう。その場合、同社のマーケティング戦略の中身及び効果を詳細に分析、検証し、さらに既存のマーケティング理論による考察もしっかり行い、結果的に、そのマーケティングの優位性を実践と理論の両面から論証できれば、それでかなりまとまった研究成果となる。検証の過程で研究の問題意識と関連性の少ない事象をただ単に羅列する、或いはマーケティング戦略の分析からかけ離れた

て、組織論とか人的資源論などのことを入れすぎると、研究の軸がぶれてしまい、何を言いたいのか分からなくなってしまう危険性がある。その意味で、今回の報告の中に軸がまだ定まっていなものが少し見受けられている。

修士論文の提出まで後2ヶ月ほどある。院生の皆さんにこの2ヶ月間をフルに使って論文の完成に取り組んでももらいたいと思う。



## ■大学院修士論文中間報告を終えて 大学生活最後の“演じるスイッチ”

大学院・地域政策研究科 経営革新専攻  
修士課程 大学院生 出海 朱絵

昨年の修士論文報告会の際、先輩方の報告を聞きながら「来年には、本当にここで発表しないといけないのか」と思いました。それ程、緊張感があつて責任感のある場所だと感じたからです。いざ発表の準備となると何から進めていいか、迷いました。発表する前には論文がある程度できあがっていないといけないからです。今年の夏は必死でした。報告会前1か月になり、Powerpointを作る際には、なるべくシンプルで万人に見やすいものに仕上げることに留意しました。それから台本を作成しました。通常、私が発表する時には、台本を作っても台本通りに発表できないところがあります。感情や表情までが発表のうちだと考えているため、要点以外がアドリブになってしまうのです。でも、今回の報告会は、今までの発表とは違って“プレゼンテーション能力”は評価の対象に入らないと聞いていたので、事前にと細かな言い回しについての台本を作成することにしました。しかし、私のポリシーとして“伝えるための表現力”は評価に入らなくてもできるだけ高いものを提供したいという思いがありました。だから、台本を棒読みする報告はしたくありません。しかし、私が作った台本はスラスラ読みにくい単語がたくさん含まれていました。本当に焦ったのはここからでした。何度も読んで



いるうちに覚えるのが普通ですが、どうしても覚えられない。それは、一字一句間違えてはいけないというプレッシャーが記憶しづらくさせていたのでしょう。「目で表現することは辞めよう、言葉の強弱で表現力を高めよう。」そう切り替えてからは、聴覚に響く声を意識することや重要な単語は特に気を付けました。また、私以外の大学院生はほとんどが留学生なので“私は母国語で発表している”というプライドもあります。こんなに緊張した一週間は今まで経験がありませんでした。私は、人前に出るときに“演じるスイッチ”というのがあります。これは、教育実習の時“日本一の教師”を演じたり、インターンシップの際には“日本一のテレビMC”を演じました。大学のビジネスアイデアコンテストの時は、“学校一の発明者”を演じていました。“演じるスイッチ”はいつも、自分に自信を持たせて自分の力を最大にする方法です。発表にかける思いは人それぞれ違うと思います。「緊張から逃れたい」と思うかもしれませんが、私は年に1回くらいChangeの瞬間を経験することが自分の成長に繋がると思っています。私は大学生活6年間のうち、他の学生より発表する回数には恵まれていたと思います。今回の論文報告会が大学生活で最後の人前での発表になるでしょう。今後たくさん発表する場に直面すると思いますが、今回の発表で“聴覚を刺激する”ということを知りましたので、継続して活用していこうと思います。

論文報告会が終わって、提出まであと2カ月です。御指摘頂いた部分を活かして自慢の論文に仕上げたいと考えています。



経営革新専攻 出海朱絵さん

## ■報告：

### 「大学コンソーシアムひょうご神戸

#### 第6回FD・SDセミナー」に参加して

経済学部 経済学科 准教授 杉田陽出

9月16日(金)、神戸大学に於いて「大学コンソーシアムひょうご神戸 第6回FD・SDセミナー」が開催された。テーマは「グローバル化する世界における大学の役割」である。筆者は午前に行われた体感型研修「異文化コミュニケーションの視点からキャリア支援を考える」と、午後の基調講演「グローバル化と大学教育」ならびにテーマ別分科会「激変する就職環境とキャリア支援」に参加した。以下、各講演の内容と感想を報告する。

まず、体感型研修では、劇作家・演出家の経歴をもつ人事・採用コンサルタントの鈴木あきら氏が、ゆとり世代を生み出した時代背景と今の社会に求められる人材、人材育成方法としての演劇ワークショップの可能性について講演した後、セミナー参加者が実際に演劇ワークショップを体験した。講演要旨は次の通りである。

ゆとり教育は賢い消費者を作るための消費者教育であり、結果として消費者の視点しかもたない学生が育ってきた。しかし、企業が必要とするのは消費者ではなくサプライヤーであり、グローバル化社会に対応したコミュニケーション能力やリスク管理能力を備えた人材である。大学に要求されるのは、学生がもつ〈安全・快適を自分が楽しむ感覚〉を〈相手に提供する意識〉に変換させることであり、そのためには他者の価値観と自身の価値観のすり合わせを行い、それを表現できる能力を学生から引き出さなければならない。これには、学生に疑似(仮想)体験をさせ、その中でのルールや自分に与えられた役割を理解し、他者とのコミュニケーション能力や表現力を養う演劇ワークショップが効果的である。

この体感型研修では、タイトルに「異文化コミュニケーション」と冠している。ここでいう異文化とは、ゆとり世代から見た社会を指すと同時に、大学教育に携わる世代から見たゆとり世代の学生を指していると思われる。異なる価値観をもつ者同士がコミュニケーションを行う際の注意点として、演劇ワークショップでは相手の視点から物事を見ようとする〈共感〉の概念に着目している。相手に〈共感〉でき、状況に応じた行動を自律的に取ることのできる人材育成を目指すには、教職員側も学生に共感を示す必要がある。つまり、教職員側も学生の価値観を頭から否定して社会や自らの価値観を押しつけるのではなく、お互いの価値観の齟齬が何に起因するのか知ることから始めるべきではないかと、今回の講演とワークショップを通して感じた。

次に、東京大学名誉教授の天野郁夫氏による基調講演では、大学教育の歴史に始まり、大学の役割や大学システム改革論などが展開された。この中で印象的だったのは、大学院を専門的な知識を身に付けた研究者養成の場ではなく、特定の専門分野を超えて幅広い視野を身に付けた大学教員養成の場にすべきという意見であった。これは、「新しいタイプの学生」を教えるには「新しいタイプの教員」の育成から始める必要がある、という視点に基づいている。これが実現可能であるか、また適切であるかは別にして、これからの大学教育にはシステム上の改革では不十分であり、人材（教員）も換えていく必要があるという論点が新鮮であった。

最後に、テーマ別分科会では、神戸大学キャリアセンター長である国際文化研究科教授の内田正博氏と、成城大学と関西学院大学でキャリアゼミを担当する森隆史非常勤講師が、「キャリア支援における不易と流行」と「これからのキャリア形成思考～想定外を生き抜くために」と題した講演を行い、参加者からの質疑応答形式で大学のキャリアサポート支援体制に関する議論が行われた。

講演の中で、内田氏は現在の学生の特徴としてリーダーシップの欠如や他律性を挙げ、他者を意識しながら自分から行動できる人間性豊かな指導的人材育成を行うことが就業力育成につながると述べた。森氏は大学教員と学生の関係は生産者と消費者の関係でよいのかという疑問を呈し、学生に必要なのは他者の受容ならびに「自分探し」ではなく「自分無くし」であり、その方法として体験型授業で行う座学講義やグループワークが有用であると述べた。学生の消費者目線の危険性や他者の価値観を理解することの重要性など、森氏の指摘は午前に行われた鈴木氏の講演と重なる点が多く見られた。

両氏の講演後に設けられた質疑応答に於いて、参加者から「教員のキャリア支援への関心が低い。教員の意識を変える方法はないものか」という質問が出た。これに対し、内田氏は教員の意識改革の難しさに同意しつつ、教授会のたびに学生の就職率に関する資料を配布して教員の意識向上に努めたという自身の経験について語った。このやり取りの中で提示された「学生の意識改革には、まず教員の意識改革から」という見解は、今回のセミナー講演者全員に共通していたように思う。大学教員は今という時代を意識し、自分たちに要求されていることを理解する必要がある。この前提があつてこそ、学生の就業力育成や社会に役立つ人材育成の実現を目指すことができる。今回のセミナーに参加して、この点を改めて実感した次第である。

## ■あつがき■ FD委員会 委員長 前田啓一

今年は紅葉がなかなか見ごろを迎えません。私たちがいららさせるほどのゆっくりとしたペースです。これも地球環境問題の影響でしょうか。

少し寂しい秋の夕暮れになると、私は時折イギリスの大学のことを思い出します。学生としての滞在ではなかったもので、誤解もあるかもしれませんが、そこでは教師と学生がゆったりとした時間の中で相互の信頼感をはぐくんできたような印象がありました。そこでは今日言われる「評価」文化とは対照的な空間が広がっていました。

私はFDについても、性急に事を進めず、なによりも教員－学生－職員が一体感を少しでも共有できる、そのような方向で着実に「改善」を進めていきたいと考えています。」



## ■編集後記■ 教務課 松谷美樹

今秋よりFD委員会担当となり、恥ずかしながら、まず「FD」について調べるところからのスタートでした。その定義は「大学教員の教育能力を高めるための実践的方法」とあります。しかし実践的方法とは？と頭の中に「？」マークを抱えつつ、10月のFD委員会および11月の公開授業に関わらせていただく中で、印象に残ったのは公開授業後に行われた意見交換会でした。先生方の様々な意見、質問、悩み…答えを1つ出すのではなく、本音をぶつけあい、話し合う共通の場を持つことが「FD」のひとつであると、ふっと理解できた瞬間でした。

あつがきで前田先生が、「教員－学生－職員の一体感」の重要性について書かれています。私自身も大学を形づくる教員、学生、職員全てがより深く関わりあうことで、FDの取組が教育現場で本当に実を結んでいくのだと感じます。

結果を急がず、過程を大事に。今後は他大学のFDの取組について情報を集め、教員の先生方と一緒に話し合いを重ねながら、良いと思う部分を本学にとりいれてゆきたいと考えています。

大阪商業大学 FDニューズレター 第9号

発行日：2011年11月30日

発行：大阪商業大学FD委員会

〒577-8505 東大阪市御厨栄町4-1-10

Tel 06-6781-8816 Fax 06-6781-8438



